

Ⅲ

小学校教育における スタートプログラムと実践事例

1 スタートカリキュラムを創ろう

各学校がスタートカリキュラムを創る上で大切なことは、小学校入学当初における指導の工夫や指導計画の作成を、全教職員が共通理解し協働して行うことです。その際には、児童の実態を十分把握した上で行うことが大切です。近隣の就学前教育・保育施設や家庭・地域との連携も図りながら、児童の実態に合致したカリキュラムを作成していきましょう。

※ 巻末資料「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き」
(文部科学省・国立教育政策研究所教育課程研究センター 平成30年3月)各資料を参照

(1) 基本的な考え方

スタートカリキュラムを創る際の基本的な考え方は、次の4つが挙げられます。

- 一人一人の児童の成長の姿からデザインする
- 児童の発達の特性を踏まえて、時間割や学習活動を工夫する
- 生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図る
- 安心して自ら学びを広げていけるような学習環境を整える

→資料:P176図1参照

(2) スタートカリキュラムを創る手順

幼児期の遊びを通した学びが、小学校での様々な教科・領域に円滑に接続されるようにするためには、入学当初の学校における教育活動全体を見てカリキュラムを創っていくことが大切です。カリキュラムを創る際には、次のような手順で進めることが考えられます。

→資料:P177図2参照

ア 幼児の発達や学びを理解する

- 幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を行う。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして幼児期の教育を通して育まれた資質・能力について理解し、児童の成長を把握しながらカリキュラムを創ることが重要である。
- スタートカリキュラムを創るにあたっては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通して、実際の幼児の姿について共通理解し、入学した児童が安心して学校生活を送るとともに、自信をもって成長し、自覚的な学びができるようにすることが大切である。
- 幼児の発達・学びの様子・指導の在り方を把握したい。⇒園への訪問・教職員との意見交換や打合せ・幼稚園幼児指導要録等の活用など

→資料:P178図3参照

イ 期待する児童の姿を共有する

(ア) 期待する児童の姿

- スタートカリキュラムを通して一人一人が確かに成長することを目指し、各学校で期待する児童の姿を明らかにすることが必要である。
- 全教職員で検討し共通理解を図る(全学年での協力体制へ)。
- 保護者にもカリキュラムの意義などを伝え、安心感や信頼感をもたせたい。近隣園にも伝える。

→資料:P178図4参照

(イ) 実施期間の検討

実施期間については、例えば、入学直後の学校生活の充実を図ることを意図したり、5月の連休を視野に入れたりするなど、2週間単位や1~2か月単位で設定することが考えられます。また、1年間を通じて、児童の様子を加味して、夏季休業明けに改めて設定するなど、柔軟に実施期間を設定する必要もあります。

さらに、実施期間が終わってからも、長期休業後などには、スタートカリキュラムの考え方を生かした指導の工夫を行い、1年間を通して、児童の状況に応じた柔軟な対応を心掛けます。

(3) 各学校のスタートカリキュラムを創る

ア 単元の構成

〈キーワード〉「体験活動・友達との関わり・児童の意識の流れ」を大切に

◎ 単元の配列：生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫が重要

(ア) 合科的・関連的な指導の工夫

- 合科的な指導 生活科を中心とした単元の学習活動において、複数の教科の目標や内容を組み合わせて学習活動を展開する。
- 関連的な指導 生活科の学習成果を他教科等の学習に生かす。
他教科等の学習成果を生活科の学習に生かす。

→資料:P179図5 参照

(イ) 単元配列表の作成

合科的・関連的な指導の工夫を行う際には、学習指導要領で各教科等の目標や内容を確認し、生活科と各教科等との単元の関連を明示した単元配列表を作成したい。

単元配列表を作成し、各教科の内容の関連を想定しておくこと、例えば学校探検で「図書室の本を読んでみたい」「僕の好きな昆虫の本はあるかな」など、授業の中で児童から発せられる言葉を受け止め、次の活動につなぎながら、学びを展開していくことが可能となる。単元配列表を基に、合科的・関連的な指導の工夫により、児童の意欲の高まりや主体性の発揮が期待できる。

第1学年 単元配列表 (例)




各教科等	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
国語	あいうえおであそぼう				
	いちねんせい	よろしくね	はるのあさ	みつけたよ	ことばのひみつ
				あめのひ	ともだちとはなそう
算数	なかまづくりとかず	くらべよう	10までのかず	なんぼんめ	いくついくつ
生活	がっこうだいすき みんななかよし				
					おおきなあれ
音楽	みんなであうたおう		おんがくにあわせて		
図画工作	すきなものいろいろ	じぶんマーク	こんなことあったよ	ねんどであそぼう	すなやつちであそぼう
体育	からだほぐし	ゆうぐあそび		おにあそび	
道徳	げんきにあいさつ	みんなでつかうもの	ともだちとなかよく	いきものとなかよし	
特別活動	入学式	1年生を迎える会			
	よろしくね	たのしいきゅうしよく	おしごとたのしいな		

==== 合科的な指導

→ 関連的な指導

「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き」より

イ 週の計画と時間配分 週案の作成

スタートカリキュラムを構成する活動の種類	
	一人一人が安心感をもち、新しい人間関係を築いていくことをねらいとした活動（安心をつくる時間）
	合科的・関連的な指導による生活科を中心とした学習活動
	教科等を中心とした学習活動

※ 本区の例もこの類型を基に作成しています。

週案(例)を作成する際に意識したポイント

	スタートカリキュラムとして大切にすること
ポイント 1	<ul style="list-style-type: none"> ○朝の会から1時間目を連続した時間とし、幼児期に親しんできた遊びや活動、交流する活動などを位置付け、楽しい気持ちで1日がスタートするように1週間の時間割を計画する ○児童が安心して学校生活を楽しむことができるように、一定の期間は同じ学習内容を繰り返す連続性と、少しずつ内容が高まっていく発展性を意識する
ポイント 2	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の思いや願いの実現に向けた主体的な学習がつながっていくように、1週間の時間割を計画する ○生活科を中心に、つながりのある他教科等のねらいを考えながら合科的・関連的な指導を行う ○思いや願いの実現に向けた主体的な学習活動をゆったりとした時間の中で進めていけるように、2時間続きなどの学習活動を位置付ける
ポイント 3	<ul style="list-style-type: none"> ○入学当初の児童の学習に対する期待感を生かし自覚的な学びにつながるために、教科等の学びの時間を1週間の時間割に位置付ける ○児童の学習意欲が続いていくように、他教科等の指導の際に生活科との関連を意識する ○入学当初の児童の発達の特性に配慮し、10分から15分程度の短い時間を活用して時間割を構成したり、具体的な活動の伴う学習活動を位置付けたりする
ポイント 4	<ul style="list-style-type: none"> ○入学当初の児童の発達の特性に配慮し、午後の時間は具体的な活動の伴う学習活動を位置付ける ○1日の終わりには、明日への期待感を高める活動を設定する

第6日		
日	4/〇(月)	4/
朝	朝の準備・自由遊び	朝の準備
	安心をつくる時間 先生の話・健康観察 歌・手遊び リズム遊び 読み聞かせ など	先生の話 歌・手 リズム 読み聞
ポイント 1	「がっこうだいすき みんななかよし」 ・自己紹介をしよう (国「よろしくね」2/3) ・学校のはてなや	「あい ぼう」 ・ひらが (国2/3)
ポイント 2	生活科を中心とした 学習活動 びつくりを見付けよ う(生1と1/3)	「くらべ ・数を (算1/2)
ポイント 3	教科等を中心とした 学習活動 「あいうおであそ ぼう」・ひらがな (国2/3)	「はる こん ・春の (生2)
ポイント 4	「なかよしだいきせん」 ・みんなでおいしく 給食を食べよう	
昼		
ポイント 5	「くらべよう」 ・数を比べよう (算2/3)	「はる こん ・春の ろう (図工 し1)

※ 朝から1時間目の内容は、台東区の例

「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き」より

◆弾力的な時間割の設定を週案の中に位置付ける

10～15分(1/3h)、20～25分(1/2h)、60分、90分

◆楽しい気持ちで1日が始められるようにする。

◆幼児期に近い生活をつくるようにする (具体的な指導の工夫例 P102～109参照)

◆カリキュラムマネジメントの視点をもって週案作成する。

スタートカリキュラムを実施する期間の週案に位置付ける。

特に入学当初はゆったりと。朝から、生活・学習規律を身に付けさせようと厳しくなってはいませんか？

見直し・修正を加えながら改善していきます。

(4) 週案作成のポイント

《 意義 》

【安心】スタートカリキュラムに幼児教育の考え方を取り入れることで ⇒ 子供に安心感が生まれます。(→小1^oロblem予防)

【成長】スタートカリキュラムで幼児期の経験を小学校の学習につなぐ ⇒ と、子供が自信や意欲をもち、成長していきます。
(→学びに向かう力・力の発揮)

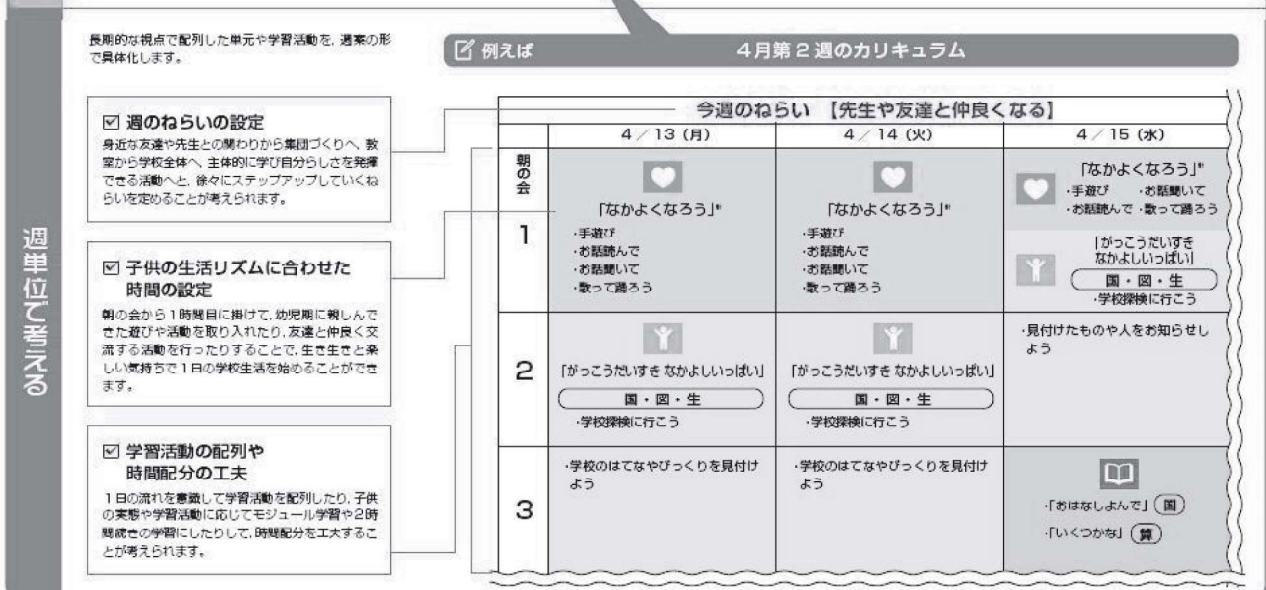
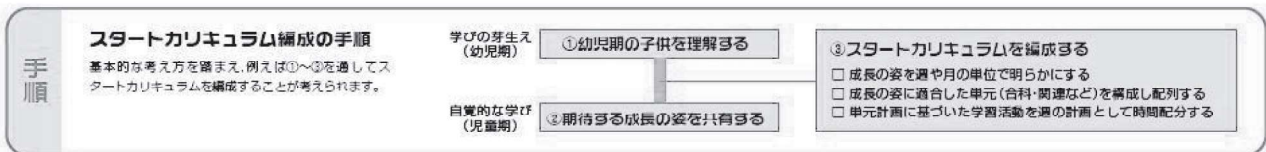
【自立】スタートカリキュラムを入り口として6年間を見通すことが、 ⇒ 子供の自立につながります。(自ら考え、判断し行動
→6年間を見通した小学校教育全体の改善へ)

《 策 》

・ 幼児期に親しんだ活動を取り入れる。
・ 分かりやすく学びやすい環境づくり。
・ 先生や友達と関わる活動をする。

・ 幼児期からの学びと育ち(遊びを通じた経験:試す・工夫する・協力・伝え合い・話し合い)を生かす環境や活動を意図的に設定する。

・ 子供が幼児期に経験してきた3つの自立(学び・生活・精神的な自立)を基盤としながら、生活科を中心としたスタートカリキュラムを学校全体で検討・編成する。



※の時間については、授業時数以外の教育活動として位置付けたり、各教科等で実施したりすることが考えられます(各教科等で実施する場合には、学習活動がその教科等の目標や内容を実現するものである必要があります。)(文部科学省「スタートブック」概要)

ア スタートカリキュラム（週ごとの指導計画）に取り入れたい視点

学習を3つの類型に分類し、単元や学習活動を配列する（前ページ図参照）。

A【なかよしタイム】「安心感がもて新しい人間関係ができるような活動」

B【わくわくタイム】「合科的・関連的な指導による生活科を中心とした学習活動」

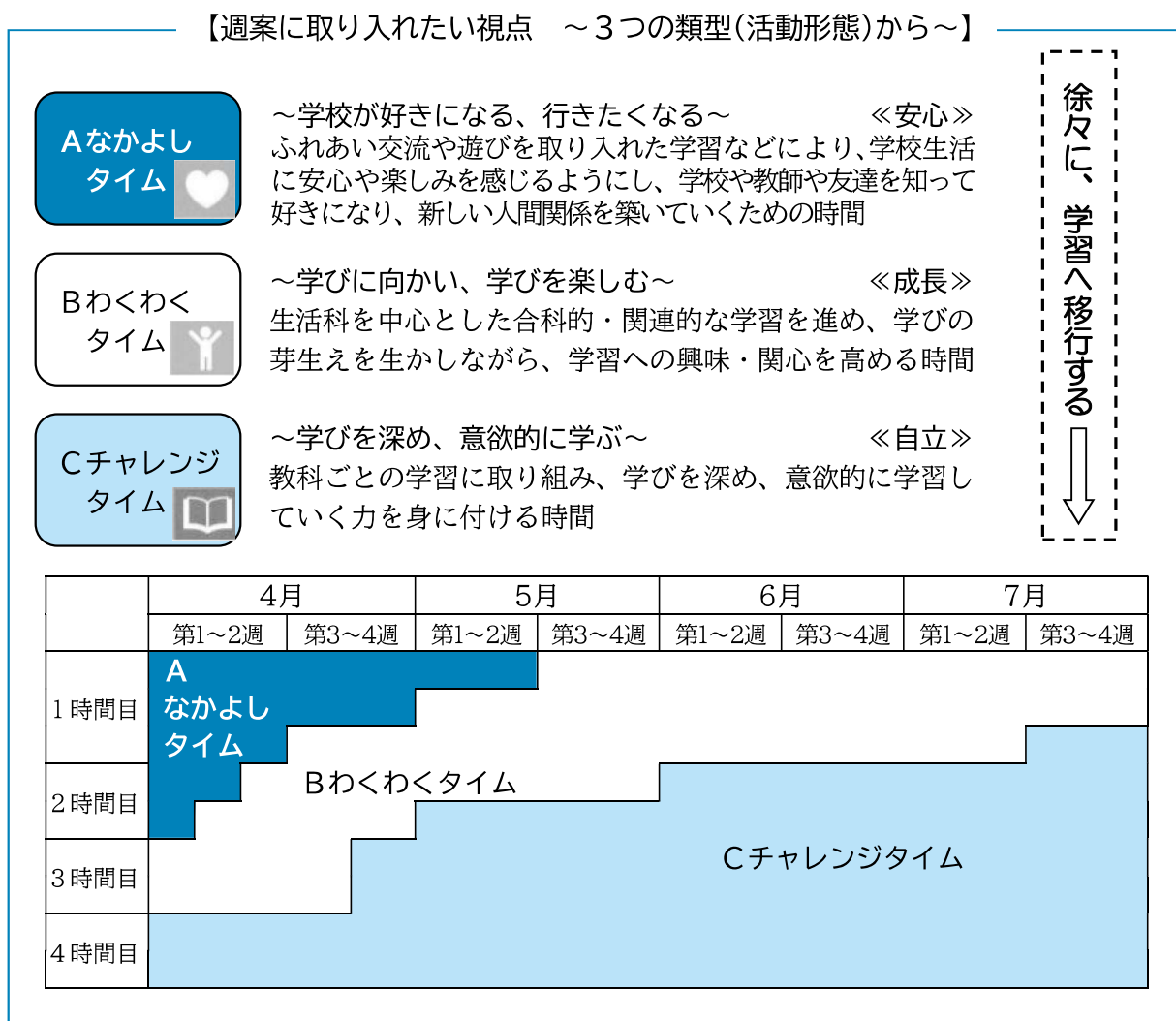
※ 生活科以外の教科等についても、「合科的・関連的な学習」を【B】として効果的に計画する。

C【チャレンジタイム】「教科を中心とした学習」

（以下、A、B、Cと略して表示する。）

- 入門期の4月から7月に向かうにつれ、AからB、BからCへと学習活動の時間がCに向かって徐々に増えるようにしていく（前ページの図参照）。

◆ 前頁の例を参考にすると、下記のようなスタートカリキュラムのイメージ図になる。



- ・ 入学当初は、特に1日のはじめは「なかよしタイム」から入り、安心や楽しさを感じさせたい。
- ・ 上記の図は、入学・入門期に「安心・楽しさ」から「興味・意欲」へ、さらに「教科中心の学習」へと長期的な観点で作成したイメージ図である。
- ・ 従って1日の流れを、A→B→Cとしているが、児童の実態や学習の内容等により、A、B、Cの順序や時間配分は柔軟に変更して、自校の実態に合わせて工夫していきたい。

イ スタートカリキュラムについて (P88~101参照)

(ア) 4月を4時間授業とした。第1学年は年間34週(他学年は35週)。

※ 各教科の年間時数を考慮に入れ、5月末の時数累計に無理のない範囲で計画を立てた。

(イ) 3つの類型A「なかよしタイム」、B「わくわくタイム」、C「チャレンジタイム」を、「な」、「わ」、「ち」と略して明示した。

(例)

な
・ 先生の話・健康観察(学活 1/3)
・ 歌・手遊び・ゲーム (な 1/3)
・ 読み聞かせ (国語 1/3)

- 左枠内の「な」は、「なかよしタイム」を表す。
- 入学当初の「先生の話・健康観察」は、特別活動(学級活動)のねらいに合致するので、学級活動の時間として計上した(生活科としている自治体もある。また、実際の内容が、学級活動としてのねらいに合致していない場合は、時数に入れずに「なかよしタイム」としての累計にすることも可能)。

(ウ) その他

給食指導

4月中は、4校時後半の時間を特別活動とし、第1学年にとって初めての活動である給食の時間を多く確保し、初歩から丁寧に指導していく(特別活動の授業として行うので、チャイムが鳴るまでは自主的な活動ではなく、担任の指導を受ける)。給食の準備や誰が何の当番か、仕事の手順や気を付けることなど、日々変わる献立や当番の仕方の具体的な話を毎日繰り返し聞いてから活動に入ること、習慣化していく。

※詳細はP112参照

児童の体調等、実態に合わせた柔軟な指導計画

幼児期の生活リズムとの違いによる疲れや集中力の維持などを考慮、実態に応じ、適宜4・5校時や激しい運動(運動会の練習・水遊びの学習など)後の学習活動を柔軟に構成する。

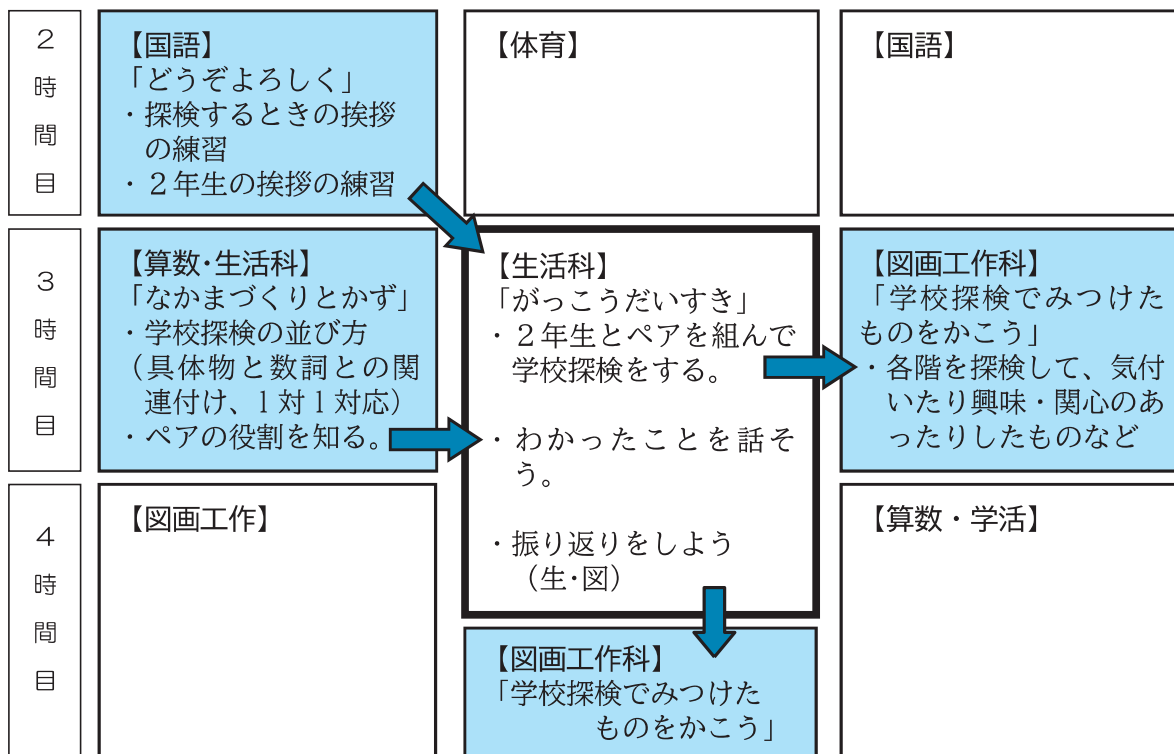
(例)モジュール化した時間配分、合科的・関連的な「なかよしタイム」、「わくわくタイム」を組み込む。


- ・ 生活科「学校たんけん」は、合科的・関連的なカリキュラム構成をする。

P90カリキュラム参照

園では、午後に休息の時間があつたんだよ!

【生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫(例)】



※ スタートカリキュラムの考え方(モジュール等の時間配分の工夫、合科的・関連的な指導の工夫など)で組んだ時間を網掛けで表し、関連的な指導の時間のつながりを  で表した。

(エ) 1単位時間で行う、A「なかよしタイム」、B「わくわくタイム」、C「チャレンジタイム」の例

A「なかよしタイム」の例		B「わくわくタイム」の例		C「チャレンジタイム」の例	
生活	な 「こうてい たんけん」 ・はるをさがそう	音楽	わ 「みんなで あるこう」 ・みんなで楽しく歌ったり歩いたりする	算数	チ 「なかまづくりと かず」 ・観点や条件を変えてなかまづくりをする ・すうじのかきかた
体育	「みんなで あそぼう」 ・ならびっこをする	生活	「がっこう たんけん」 ・学校内を探検しながら図書室に入り探検	国語	「ひらがなの れんしゅう」 ・「こ」のひらがなを、形に気を付けて書く
	・遊具の使い方を知る ・固定遊具で遊ぶ	国語	「おはなしを 楽しもう」 ・図書室で、好きな本を見つけて読む		
2教科3活動(15分×3)		3教科×3活動(15分×3)		2教科2活動(1/2校時×2)	

◎ いずれの例も、児童の興味・関心や集中力の維持のために1単位時間を2～3モジュールで計画。ほかに、1教科を2～3モジュールにして行う工夫あり。どの学年でも実践あり。

【Aの例】 最初は、生活科で、「こうてい たんけん」をしに校庭へ行き、春の花や芽、昆虫などを観る活動である。
観ているうちに、校庭にある遊具にも自然と目がいき、固定遊具で遊びたくなり、体育の授業へと移る。
遊ぶために(目的意識)必要な、固定施設の使い方や安全の学習もしっかり聞くことで遊び始められる。この授業は、生活科を中心とする関連的な学習の例だが、安全面やルールなどを、受動的に教師から指導されるのではなく、教師の授業展開の工夫により、「教えられる」というより、遊ぶために自分たちから「主体的」に学ぼうとするようになっていく授業展開である。

「先生、あれで遊びたいよ。」
(意欲)
「じゃ、きまりを聞いてね。」
初めからルールを押し付けて遊ばせるのではなく学びに向かい学びを楽しめるようにする。
○ 思いを膨らませ、主体的に学び(ルールを聞き)、夢中になって遊ぶ(学ぶ)。

【Bの例】 P86の【生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫(例)】のように、生活科と各教科・領域の学習を関連させたカリキュラム構成が、入門期の児童には、滑らかな接続のために適している。

【Cの例】 「生活科を中心とした関連的な指導の工夫」ではなく、1単位時間の中で、複数教科等を組み合わせている。この場合、AやBのように、幼児期の遊びや生活を取り入れた学習ではなく、教科の学習にチャレンジしている。しかし、内容の違う(関連していない)2活動を短時間で学習しているので(時間配分の工夫)、児童は飽きることなく、興味・関心や意欲をもって学習活動できる。

(オ) B「わくわくタイム」1単位時間の中で行う関連的な指導の例

例1 避難訓練

音楽	「知っているうたをうたおう」 ・並んで歌いながら歩こう
学活	「避難訓練の仕方をしよう」 ・防災ずきん・避難の仕方 ・「おかしも」の合図
行事	避難訓練 ・先生の指示をよく聞こう

音楽1/3+学活1/3+行事1/3
(または、学活1/2+行事1/2)

例2 給食指導

生活	「がっこう たんけん」 ・教職員室探検 ・ランチルーム探検 ・栄養士の話を聞く(TT)
学活	「給食の準備をしよう」 ・手洗いの仕方・清潔 ・配膳の仕方

生活2/3+学活1/3

例3 1年生を迎える会

生活	「がっこう たんけん」 ・たいいくかん たんけん
学活	「1年生を迎える会の練習をしよう」 ・会について知る ・ならびかたを知る

生活1/3+学活2/3